

－2 「一町一寺」の町の営みにみる歴史的風致

（1）はじめに

熊本城の南部に位置する新町・古町は、加藤清正の熊本城築城とともに城下町整備に着手された地区である。そのうち古町は、その街区の1辺がほぼ120mの正方形で整然と碁盤目状に区画され、その中央部分に寺院が配置された「一町一寺」の町割りが地図上にも、視覚的にもはっきりと確認できる地区である。

この地区は城下町として発展したが、明治10年（1877）の西南戦争の際に戦場となり、ほとんどの建造物が焼失した。しかし直後から多くの建造物が再建され、現在も多くの寺院や町屋などの歴史的建造物が残る。

江戸時代に形成された「一町一寺」の町割りのなかに歴史的建造物が立ち並び、そこを北岡神社の神輿行列が通り、昔から続く祭礼が継承され、良好な市街地環境が形成されている。



北岡神社例大祭の様子

（2）「一町一寺」の町割り

「一町一寺」制は加藤期から細川期にかけて形成されたと見られる防衛体制で、区画の中央部分に寺院を設け、その周りを町屋で囲むものであった。南方の薩摩・島津氏への備えであったとされており、有事の際には兵営地に活用することを考えていたとされる。

江戸時代に成立した一町一寺の町割りは現在もほとんどそのまま残されており、城下町の風情を感じさせる町並み景観の形成に寄与している。

江戸時代の絵図に描かれた寺は、西南戦争で建物が焼失したものの、明治から昭和初期にかけて同じ場所に再建された。しかし、平成28年(2016)熊本地震により大きな被害を受け、多くは復旧しているが、善教寺など建築物の解体を余儀なくされた寺は復旧に向けた活動を継続している。

【一町一寺を形成する寺】

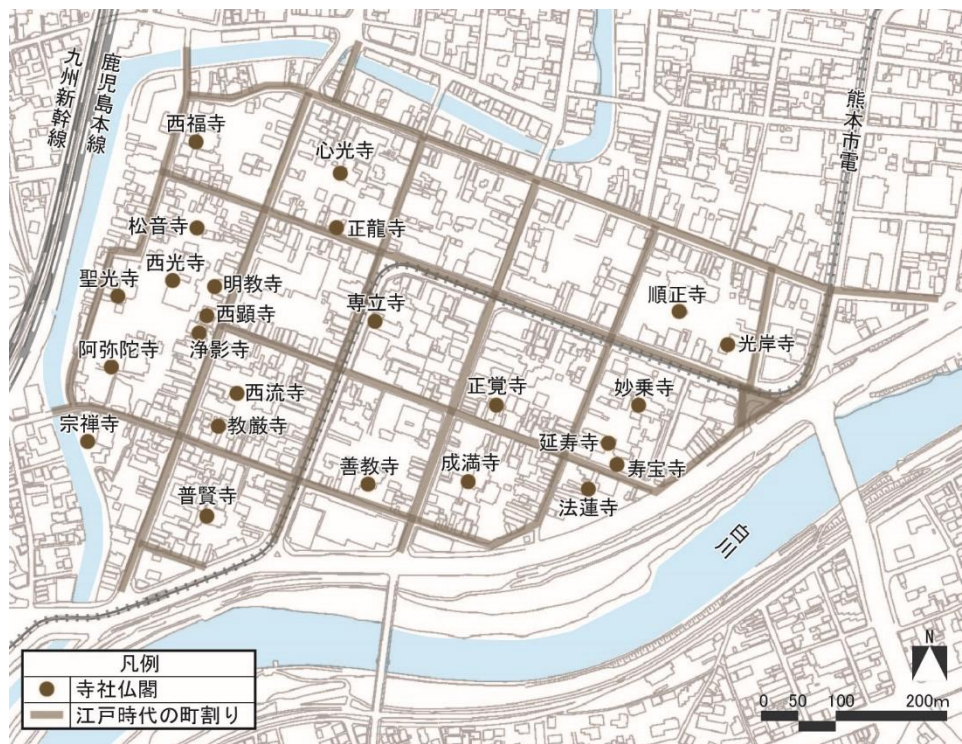
ふげん じ 普賢寺	そうぜん じ 宗禅寺	じょうまん じ 成満寺	しょうかく じ 正覚寺
ぜんきょう じ 善教寺	さいりゅう じ 西流寺	きょうごん じ 教厳寺	さいこう じ 西光寺
めいきょう じ 明教寺	じょうよう じ 浄影寺	あみだ じ 阿弥陀寺	さいけん じ 西顕寺
さいふく じ 西福寺	しょうおん じ 松音寺	ほうれん じ 法蓮寺	しょうこう じ 聖光寺
しんこう じ 心光寺	せんりゅう じ 専立寺	しょうりゅう じ 正龍寺	



古町之絵図

(江戸時代、公益財団法人永青文庫 所蔵)

※オレンジ色部分が寺域



現在の地図

(3) 歴史的風致を形成する建造物

①北岡神社例大祭に関わる建造物

ア 北岡神社

承平4年(934)藤原保昌^{ふじわらのやすまさ}が肥後国司として下向した際、京都の祇園社(八坂神社)の御分霊^{かんじょう}を勧請し、創建されたのが始まりとされる。その後正保4年(1647)には現在地(西区春日)に遷座された。

現在の境内には、神殿・拝殿・舞殿・楼門・摂末社^{せつまつしや}がある。昭和9年(1934)11月10日の九州新聞の記事に鎮座一千年を記念して改築中だった神殿、拝殿が竣工し、翌11日より9日間御遷座記念大祭が執り行われることが記載されている。神楽殿は昭和33年(1958)の御鎮座一千二十五年記念に新築、拝殿・楼門は昭和58年(1983)の御鎮座一千五十年記念に改修された。

境内の摂社は疫神社^{えき}(寛政12年(1800)建立)、京国司神社^{きょうこくし}(正徳3年(1714)遷座)、末社は国造神社^{こくぞう}(延宝3年(1675)建立)など9社がある。

神社入口の明治43年(1910)2月と刻印された鳥居の両脇にある夫婦楠は、遷座以降御神木として崇められている。厄除海運・夫婦円満、縁結びなどの御利益があるとされ、多くの参拝客が訪れる。



北岡神社拝殿



鳥居の両脇にある夫婦楠

②白梅天満宮大祭に関わる建造物

ア 白梅天満宮

古町西部にあたる細工町通りの東側、建物と建物とのあいだ、幅1mほどの路地を抜けた先に楼門と天満宮がある。

元は16世紀末の隈本城主・城親賢^{じょうちかまさ}の茶屋跡に旧臣平川氏が祀っていた天神を、明治維新の際の神仏分離令後に細工町に移設したものである。明治10年(1877)の西南戦争の際に焼失し、直後に仮殿が建設・再建された。しかし、昭和16年(1941)12月に火災に遭い、現在の社殿は昭和39年(1964)に再建されたものである。

この天満宮については、寛文9年(1664)11月以降の記録(「天満宮御祭礼

記録」が残されていたが、西南戦争により焼失した。その再建以降の「天満宮御祭礼記録」は所在不明になっており、昭和29年（1954）以降の記録が現存している。その記録によると、白梅天満宮の再建に伴い、昭和40年（1965）5月24日に棟上げ式、同年6月20日に落成式を実施している。

また、拝殿の正面にあった楼門は、熊本地震の被害により倒壊したが、白梅青年会をはじめとした地元の有志等により、復元の計画が検討されている。

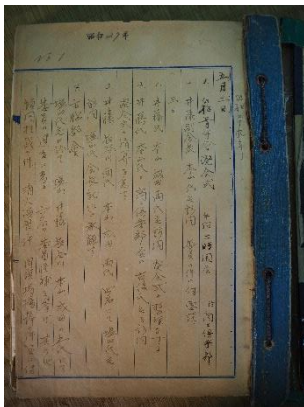
なお、倒壊した楼門の部材には、火災の影響とみられる焦跡等もあり、再建の際に以前の部材を使用していることが窺える。



白梅天満宮入口



白梅天満宮（震災後）



昭和29年（1954）以降の記録



震災前の白梅天満宮

③町屋建物などの歴史的建造物

新町・古町には数多くの歴史的建造物が現存するが、ここでは主に北岡神社例大祭の神幸行列の道中やその周辺に位置する建造物を示す。

ア ^{うえむらげんぞう}上村元三商店

元は明治から続く金物店で修業した初代が、その店が廃業したため、昭和31年（1956）に新たに金物店を開業するために住居と隣の店舗を1軒にした建物であり、登記簿では「昭和貳拾四年九月貳拾日受附」の記載を確認できる。木造2階建切妻造^{きりづまづくり}で間口4間の建物を現在は、三代目が飲食店や店舗として活用している。



上村元三商店

イ ^{くろせ}黒瀬商店

黒瀬商店は、古町西部にあたる細工町通^{さいくまち}りに面して事務所、その奥に住居がある。間口5間半奥行10間の木造2階建切妻造の事務所と間口5間半奥行約7間木造2階建寄棟造^{よせむね}の住宅を渡り廊下でつないでいる。建築年は大正末期と言われているが、登記簿により確認できた「昭和壱参年壱月壱参日受附」が確認できる一番古い記録である。



黒瀬商店

平成28年（2016）熊本地震で住宅部分は大きな被害があったが、復旧工事が完了している。

ウ ^{りょうりや}料理谷邸（商エクラブ）

この建物は代々熊本藩の料理係として仕えた家系である料理谷家が、明治23年（1890）に料理屋として建てたといわれており、登記簿にも「明治貳参年四月貳拾壱日登記」と記録が残っている。間口7間半、奥行き12間半で木造2階建切妻造である。



料理谷邸（商エクラブ）

手すり格子や出格子^{でこうし}が残り、当時の雰囲気を残している。

エ 二本木神社

二本木神社は『肥後國誌』に遥拝大明神社として仁和3年(887)に創建されたと記されているが、現在地へいつ遷座されたのかは不明である。祭神は健甕龍命、阿蘇都媛命である。二本木神社と改めた明治39年(1906)に、鳥居や狛犬が設置されたことが刻印からわかる。



二本木神社

神殿の建立については境内にある改築記念碑に昭和9年(1934)と刻まれている。また、安政6年(1859)の刻印がある猿田彦大明神の石碑も境内に設置されている。

オ 「一町一寺」を形成する寺

「一町一寺」を形成する寺は、加藤清正が熊本城築城の際、古町地区に招いた寺である。「古町之絵図」(江戸時代)などにもその名前が見え、当時から現在地に存在していることが分かる。

a 正龍寺

『肥後國誌』によると、慶長9年(1604)に現在の位置に建てられたと記載されている。この寺は11代から13代にかけて学寮を営んでおり、松本喜三郎^{まつもと きさぶろう}が人形造りの研究を行った。当初の建物は明治10年(1877)の西南戦争の際に焼失し、現在の建物はその直後に再建されたものであるといわれる。



正龍寺

古くは昭和22年(1947)11月1日撮影の航空写真において、その存在を確認できる。

b 阿弥陀寺

加藤清正が熊本城築城の際に古町地区に移転させた寺のひとつである。『肥後國誌』によると、もとは白川岸にあって周辺地域が阿弥陀寺町と名づけられていたが、度重なる白川の洪水に遭い慶長年間(1596～1615年)に現在地に移

第2章 熊本市の維持・向上すべき歴史的風致

ったとされる。敷地内には、阿蘇神社大宮司
阿蘇^{あそ}惟^{これ}光^{みつ}や、加藤清正の重臣で熊本城の築
城の名手といわれた飯田^{いいだ}覚^{かく}兵衛^{べえ}の供養塔な
どがある。

古くは昭和40年（1965）撮影の写真において、その存在を確認できる。



阿弥陀寺

c 西顕寺

もとは二本木にあり西現寺といったが、慶長年間（1596～1615）ごろ加藤清正の命により現在地に移り、寛永元年（1624）に西顕寺と改めた。

本堂については、登記簿に「明治年月日不詳新築」と記載されており、明治期に建てられたことが確認できるのみである。



西顕寺

d 浄影寺

慶長年間（1596～1615）ごろに現在地に造立され、寛永20年（1643）に西光寺の末寺として寺号を免許された。

明治10年（1877）の西南戦争で本堂・庫裡^{くり}ともに焼失し、明治20年（1887）に本堂を再建し現在に至るとされ、登記簿にも「明治20年月日不詳新築」と記載されている。



浄影寺

e 西光寺

明応年間（1492～1501）に山鹿郡片保田村^{やまが かとうだ}（現在は「方保田」と表記）に建立されたが、加藤清正の命により現在地へ移転した。県内の浄土真宗として最古の歴史をもち、県内有数規模の寺院である。寺伝によると、伽藍^{がらん}は熊本城築城の余材で造られ、加藤清正も度々参詣しており、清正奉納の『一切経』^{いっさいきょう}（大蔵経）の大半が現存している。



西光寺

明治10年（1877）の西南戦争で焼失したが、本堂については、明治27年（1894）

に再建されていることが、登記簿の記載（「明治27年月日不詳新築」）から確認できる。

f 明教寺

天正2年（1572）に現在の熊本市北区植木町^{うえきまち}に本堂を建立し、その後慶長10年（1605）に加藤清正の命により現在地に移転して現在に至るとされるが、『肥後國誌』には「寛永15年（1638）寺号免許」と記載されており、現在地への移転に関する正確な年代は定かではない。



明教寺

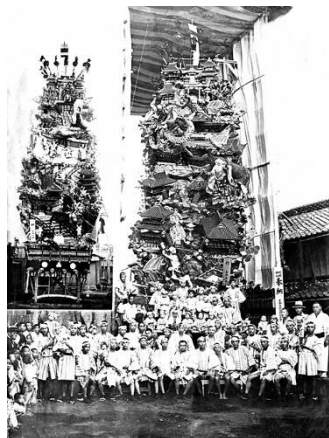
なお、昭和22年（1947）11月1日撮影の航空写真では、現在の位置に確認できる。

（4）歴史的風致を形成する活動

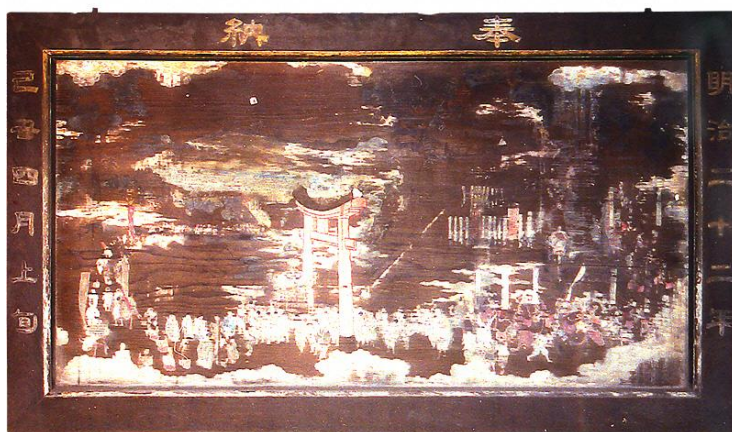
①北岡神社例大祭（祇園祭）

ア 歴史と概要

『祇園宮御由来其外一式記録』^{ぎおんぐうごゆらいそのほかいっしききろく}（寛政2年（1790））に祭りの内容が詳しく書かれている。これによると、まず旧暦5月29日に注連立^{しめたて}神事、6月5日と7日に掬垢離^{きくごうり}（神事に先立って身を清めるために潮水^{しほ}で穢れ^{けが}を祓^{みそぎ}う禊^{みそぎ}の行事で「塩干河神事^{しおひがわしんじ}」とも呼ばれた）、8日と14日に神幸行列^{しんこう}が執り行われ、期間中には神楽や能楽、山車の奉納が行われていた。『歳序雑話』^{さいじよざつわ}（天和3年（1683））をみると、一般の民衆にとっても北岡神社の祇園祭が熊本の夏の風物詩であったことが分かる。



神幸行列の山車（大正2年（1913）8月）
（北岡神社所蔵）



明治期の祇園祭の様子（明治22年（1889）4月奉納絵馬）
（北岡神社所蔵）



奉納演芸の様子（昭和7年（1932））
（北岡神社所蔵）



大正期の神幸行列の様子
（西唐人町通り、大正9年（1934））
（北岡神社所蔵）

明治になると、新暦8月1日から5日までが祭日となり、7月29日に塩湯しおゆ取神事とりきくごおり（掬垢離の形が変わったもの）、4日に神幸行列が執り行われるようになった。神幸行列に随兵が参加するようになったのは明治時代以降と伝えられる。明治27年（1894）の鉄道敷設に伴って行列のルートが変化した、明治22年（1889）に奉納された絵馬や大正期の古写真からは、盛大で華やかな行列や祭りの様子がうかがえる。

しかし、戦後の昭和29年（1954）を最後に大規模な神幸行列が中断する。その後も相撲や子供神輿行列の奉納などが行われたが、夜市も次第に姿を消し、神楽や能の奉納は変わらず続けられていたものの、祭りの賑わいは失われつつあった。

現在祭日は8月1日から3日となったが、平成19年（2007）には子供神輿行列が15年の休止を経て再開し、境内にも夜店が並ぶようになり、徐々にかつての賑わいを取り戻しつつある。

イ 現在の祭りの日程

- 8月1日 第一日祭・神楽奉納
- 8月2日 第二日祭・神輿神幸行列
- 8月3日 献幣祭けんぺいさい・能楽奉納

※このほか祭りの期間中、演奏や舞踊の奉納、ゆかたコンテストやのど自慢大会などが行われる。

ウ 神輿神幸行列

神幸行列の様子は、『祇園宮御由来其外一式記録』に天慶2年（939）6月14日の日付で記録されている。これによると、行列の先頭から鉦、笛・太鼓・ど

ら等の鳴り物、神馬、神輿三基と両脇に御太刀や唐団扇、その後方に神官や勅使代と伝奏が輿に乗り、300人の随兵騎兵隊、随兵頭・国司、町鉾が続いたとされる。また、『大祭神幸式之順』（大正7年（1918））によると、その形態に変化があるものの、多くの人が行列に加わっていることが分かる。『大祭神幸式之順』に記された神幸行列の道順は、神社から祇園橋を通過して古町エリアをめぐり、辛島町周辺を通過して天神社（現在の山崎菅原神社）で休憩し、桜町から洗馬町方面を通過し、再び古町エリアをめぐって石塘から二本木町を通過して旧社地にあった御旅所へ到着している。そして宮寺区～田崎区～万日区～春日区を経由して神社へ戻っていた。

このような規模の大きな神幸行列は昭和の初めごろまで行われていたが、交通事情の悪化と人手不足によって昭和29年（1954）に中断された。その後は、「歳如雑話」に記載のある能の奉納や、神楽の奉納は継続して行われていたが、神輿行列や相撲の奉納などは断続的なものであった。

現在行われている神輿神幸行列は、平成19年（2007）に15年振りに再興された子供神輿行列が基礎となっている。現在の行列は北巡行（朝巡行）・南巡行（昼巡行）の二部となっており、そのうち北巡行ルートは北岡神社を出発して一町一寺の町なみを巡るルート、南巡行ルートは以前御旅所があった二本木周辺までを巡るルートである。

北巡行では、多くの歴史的建造物を背景に行列が進む。北岡神社拝殿前から出発して細工町通りに入ると、阿弥陀寺、西願寺、浄影寺、西光寺、明教寺などの寺院を左に見ながら進み、西唐人町通りに入って明八橋付近で休憩となる。西唐人町通りを出ると、北岡神社への帰路となる。道中には、正龍寺などの寺院、上村元三商店や黒瀬商店、料理谷邸などの明治から昭和初期にかけて建築された建造物がある。そのほか多くの町屋



細工町通り・西光寺の前を通る行列



正龍寺の前を通る行列



黒瀬商店の前を通る行列

建物が並ぶ一町一寺の町なみを進み、北岡神社へと戻る。

南巡行では、JR 熊本駅前を通り、旧御旅所がある二本木周辺を巡る。このルートでは駅近くの再開発エリアを巡行することになる。北岡神社に戻ると拝殿前に集まり、行列は終了となる。

②白梅天満宮大祭

ア 歴史と概要

昭和52年（1977）発行の『五福百年』には、明治10年（1877）以降の「天満宮御祭礼記録」について書かれている。これによると、寛文9年（1664）11月以降台帳を作り、座頭や付属の品名を記録し続けてきたことが分かる。現在、昭和39年（1964）の再建以降の記録が残されており、大祭の準備の段取りなどが記載されている。

大祭は、毎年11月15日で、その前日14日に前夜祭が行われる。14日の前夜祭には女性が参加できず、料理も男性の手で行うしきたりがあり、このしきたりは現在も続いている。

前夜祭に向けて作られる料理は「風神大根^{ふうじんだいこん}」と呼ばれており、輪切りの大根に多量の唐辛子を入れ、その後、ごまめ（カタクチイワシを干したもの）・醤油・酒で味付けし、4～5時間煮込んだものである。2切れと食べることができないほど辛いが、うま味があり、これを食べるとその年には絶対に風邪を引かないという言い伝えがある。風神大根が出来上がると、酒などとともに、御神体をまつるお社へお供えする。

また、周辺の家庭は風神大根が出来上がるころ、鍋などを持って天満宮に集まり、風神大根をいただいて帰るが、その夜に行われる前夜祭では、この風神大根を肴に天



風神大根



男性だけの料理の様子①



男性だけの料理の様子②



炊きあがった風神大根

満宮で酒宴が開かれる。

15日の大祭では、北岡神社の宮司を招いて神事・神楽があり、その夜も天満宮で酒宴となる。

イ 大祭の様子

平成28年（2016）熊本地震により楼門が倒壊し、それ以降規模を縮小して開催している。

a 11月13日

翌日の前夜祭の準備のため、この日の夜に天満宮の清掃や、風神大根の料理に使用する鉄鍋などの調理器具、かまどの清掃、焚き木の準備を行う。



鉄鍋とかまど

b 11月14日

朝から風神大根の準備を天満宮で始める。大根約50kgを洗って、厚さ2cmほどに輪切りにし、それを鉄製の大釜で約2時間煮る。大根が軟らかくなると、鍋の表面が見えなくなるほどの赤唐辛子（刻んだもの）、ごまめ、醤油、酒を順番に入れる。その後、水気がなくなるまで、約2時間煮る。

出来上がった風神大根は別の鍋に移され、酒などとともに10個ほどを天満宮にお供えする。

このころになると、近所の方が大根を貰いにやってくる。鍋などを片手に天満宮にお参りし、大根を貰って帰る。

地震前までは、このあと天満宮で前夜祭が行われていたが、地震後は倒壊した楼門がそのままにされており、安全確保等の面から前夜祭を休止している。



調理中の様子



水気がなくなるまで煮られた大根



天満宮にお供えされた風神大根



風神大根の振る舞い

c 11月15日

この日は正午以降に北岡神社の宮司を招き、神事・神楽を行う。このあと直会となるが、ここでも青年会の代表などとともに風神大根を食す。

こののち、天満宮内外の清掃を行い、大祭は終了となる。

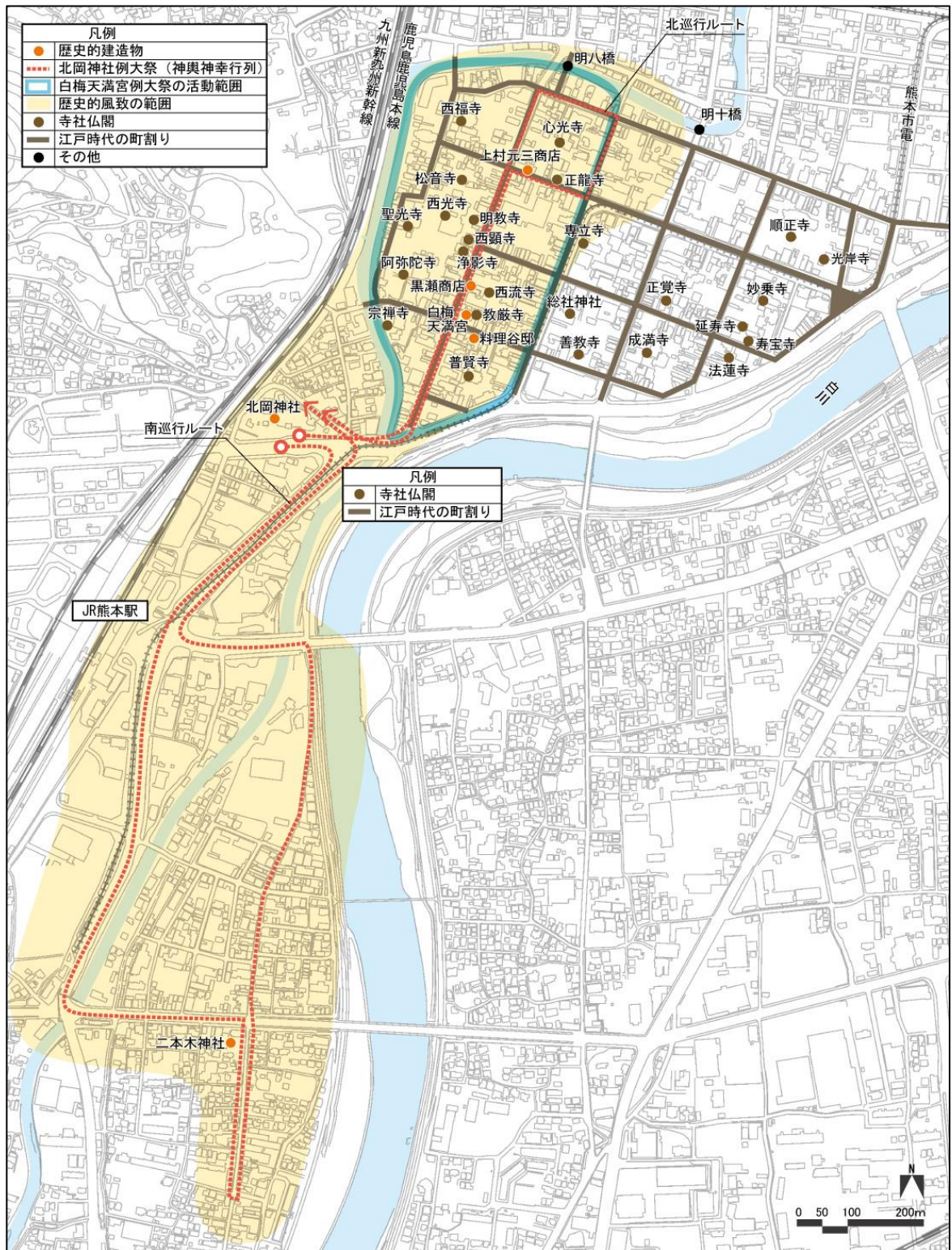


直会で風神大根を食す

(5) まとめ

古町は、加藤清正の熊本城築城とともに城下町としての整備が始められ、1辺がほぼ120mの碁盤目状に区画され、その中央部分に寺院が配置された。この「一町一寺」制が地図上にも視覚的にもはっきりと確認できる地区である。

この町割りのなか、明治から昭和初期の歴史的建造物が立ち並び、北岡神社例大祭の神幸行列が練り歩く。また、この町で白梅天満宮の祭りのような昔から続く地域の年中行事が継承されている。この地区では、歴史的建造物と伝統的な活動の保存や継承に関する取組が行われており、それらを活かしたまちづくりへの機運が醸成されている。



「一町一寺」の町の営みにみる歴史的風致の範囲